

## アメリカザリガニ防除による水生昆虫・二枚貝の復元と今後の課題

シナイモツゴ郷の会 長谷川政智・高橋清孝

淡水魚のタナゴ類は、絶滅危惧に指定されている種が多く、全国で生息地が10個所以下となった絶滅危惧IA類のゼニタナゴもその1種で令和7年2月には特定第一種国内希少野生動植物種となった希少な淡水魚だ。ゼニタナゴ等タナゴ類は二枚貝に産卵する。シナイモツゴ郷の会が保全している大規模ため池ではタガイに産卵する。秋にタガイに産卵された卵は、孵化して翌年の春まで仔魚の状態となってその中で過ごす。



図1 さまざまな大きさのタガイ 2025年9月15日撮影

タガイなど二枚貝は、グロキディウム幼生を水中へ放出し、幼生はハゼ類などのヒレなどに一定期間寄生して過ごした後、魚から離れ水底付近で生活する。したがって、タガイの繁殖にはハゼ科魚類の存在が不可欠である。保全池にはヨシノボリ類とジュズカケハゼが多数生息しているため、タガイの繁殖条件は整っている（図1）。

一方でアメリカザリガニは、魚類の卵や二枚貝を捕食し、さらにはその生息環境も変化させる。保全池でもアメリカザリガニの大繁殖によってタガイや魚類が大きく減少し2014年には、大規模ため池でタガイとゼニタナゴが確認できなくなった。二枚貝と魚類の復元

表1 保全池におけるモニタリング調査時のタガイ出現数

調査年	2014~ 2019	2020	2021	2022	2023	2024	2024
月/日	-	12/10	8/21	3/26	3/10	3/18	10/20
個/							



図2 捕食されたタガイの幼貝 2024年9月16日撮影

のためアメリカザリガニの駆除を2014年から開始し、2016年からは新開発の連続捕獲装置等を導入し本格的な駆除を開始した。また、保全池には駆除と並行して、隣接するため池からタガイの移植も行った。その結果、2020年以降タガイが採取されるようになり、2023年には幼貝が多数採取された。2024年3月には個体数の増加が確認できたが、10月には半減してしまった（表1）。2024年

8月にはアメリカザリガニが異常に繁殖して増加し、夏季にタガイ小型個体の捕食が多数見られた（図

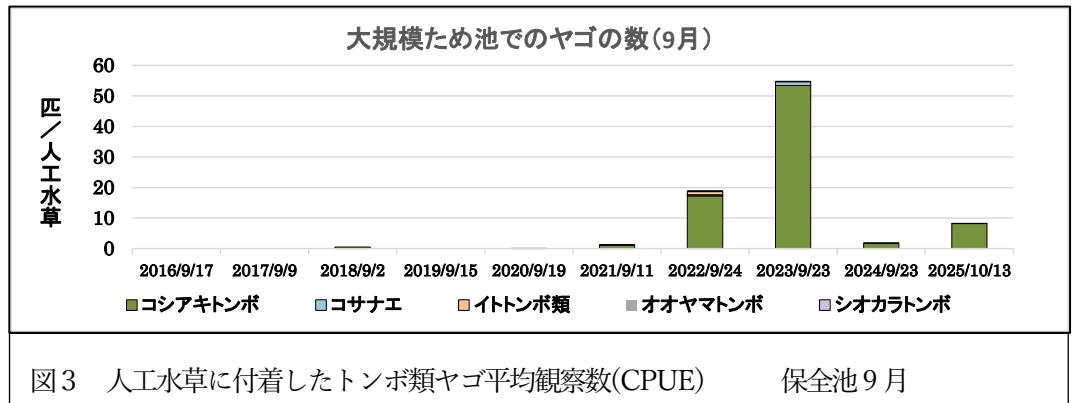


図3 人工水草に付着したトンボ類ヤゴ平均観察数(CPUE) 保全池 9月

2)。このため、小型ザリガニ専用トラップ10台を増設する等して捕獲圧を高めた結果、9月以降アメリカザリガニの捕獲数は大きく減少した。

水生昆虫もアメリカザリガニの影響を大きく受けている。大規模ため池では2020年までトンボの幼虫ヤゴを確認することは稀だったが、アメリカザリガニの捕獲数の減少に合わせ2023年には大きくその確認数が増加した（図3）。しかし、2024年にはヤゴの確認数が再び大きく減少してしまった。これはタガイと同様に増加したアメリカザリガニの小型個体による食害の影響と考えられた。これらのことから8月における連続捕獲装置のアメリカザリガニ平均捕獲数（CPUE）が17尾/台以下であればヤゴは急増するが、ザリガニのCPUEが20尾/台以上に増加すると激減することが分かった。2025年は連続捕獲装置の平均捕獲数（CPUE）が15.7尾/台となりヤゴの確認数も増加した（図3）。この結果は、アメリカザリガニを低密度管理する際に、効果的な捕獲努力量を決定する重要な根拠となり得る。したがって、捕獲と合わせて人工水草等を用いた復元生物の定量的なモニタリングが必要と考えられる。また、低密度化した堰堤には葦が多く生育するようになりそれを利用する水生昆虫も人工水草などで新たに確認できるようになってきた。

2024年に見られたアメリカザリガニ小型個体の増加は県外でも広範に見られたことから、2023～2024年の年平均気温の上昇率が過去最高であったことが影響している可能性がある。温暖化の進行により温暖な気候を好む外来種が勢力を拡大しつつあり、被害の増加を防止するための対策が必要となっている。2025年も高気温が持続し、特に夏季に高気温が継続する中、長期にわたり少雨となったため、ため池の水生動物は大きな影響を受けていると考えられる。今後は生き物たちの生息状況を的確に把握し、温暖化の影響を考慮しながら、対策を考える必要がある。